

平成 30 年 6 月 25 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04363

研究課題名(和文) 教育不信の時代における教師のライフヒストリー

研究課題名(英文) Life History of Teachers in the Era of Distrust for Education

研究代表者

山田 浩之(Yamada, Hiroyuki)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：60258324

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)： 研究期間内に大きく次の2点について分析を行った。1)戦後における教員像の変化。新聞記事の学校教員に関する記述を分析し、1970年代の労働者、1980年代の教師批判、さらに2000年以後は労働環境の悪化が語られていた。2)教員のライフヒストリーの分析。退職した教員などを対象にしたインタビューにより、その教員という職業に対する考え方を分析した。とくに早期退職した教員は、固定的な教員の職業イメージに縛られ、そこから脱することができていなかった。

研究成果の概要(英文)：Mainly following two topics were examined. 1)Transition of teacher images in postwar Japan. Teacher images until 1970s were as workers, but they had changed to be criticized in 1980s. After 2000 the images have changed again. Teachers are not criticized and the images became positive. 2)The examination of teachers life history. Teachers who resigned early were interviewed and examined their life history.

研究分野：教育社会学

キーワード：教員 ライフヒストリー 多忙化 教員像

1. 研究開始当初の背景

近年の教育改革により学校選択制や民間人校長の登用、授業評価、学力調査、また学校評議員制など多様な制度が導入されている。また、最近のいじめ問題や教師の不祥事の報道に見られるように教師、あるいは学校への不信が高まり、それが教師への批判や保護者との関係の難しさを助長している。こうした教育現場の激変が教師の仕事や生活をどのように変化させているのかはアンケートなどの実証的な調査では明らかにできない。教師の声に耳を傾け、教師の立場から教師の問題を検討するためには、教師のライフヒストリー研究が必要とされる。

ライフヒストリーはたんに教師の力量形成や成長、あるいはその変化を明らかにしようとするものではない。むしろ現在のトップダウンによる教育改革と保護者や地域、また社会により抑圧された教師の声に耳を傾け、教師の立場から現在の教育に変化を求めようとする手法である(たとえば Goodson & Sikes『ライフヒストリーの教育学』昭和堂、2006年)

したがって、ライフヒストリーにより明らかにされるのは、アンケートなど実証的データのみで提示される教師の現状のみではない。欧米での Goodson による一連の研究が示すように、教師が置かれたさまざまな状況から現在の教育改革や学校の状況を検討し、それが教師の職務や生活に与える影響や、教師がいかに問題に対処しようとしているのかを明らかにすることができる(例えば Goodson, 2003 Professional Knowledge, Professional Lives: Studies in Education and Change, Open University Press など)。このことにより、現在の教師の職場環境がもたらす問題をいわばボトムアップにより明確にし、教師自身が、また研究者や行政がそうした問題にいかに対応すべきかが明らかにできよう。

とくに教育の市場化が進み、数多くの教育改革が実施される一方で、いじめなどの教育問題が大きな話題となっている。こうした中、教育改革がもたらす影響については親や生徒、また地域との関係が分析され、多くの場合それらの利益が優先して語られてきた。しかしもう一方の当事者である教師に関しては、その「能力不足」や問題行動などの問題点が指摘されることはあっても、教師の職場や職務の変化がもたらす影響についてはほとんど問題にされてこなかった。むしろ教員免許更新講習や研修の増加など、さらに教師を多忙にする政策がとられてきた。これは教師に対する社会や保護者からの不信がもたらしたものである(山田浩之「信頼と不信」『教育社会学研究』第86集、2010年)。こうした教師の現状を明らかにし、また不信ではなく信頼を取り戻すには教師のライフヒストリーによるボトムアップの分析が必須であろう。

2. 研究の目的

そこで本研究では教育改革と教師や学校など教育に対する不信の中で激変する教師の職務内容や職場環境の実態を明らかにし、教師がそうした変化にいかに対応しているのかをライフヒストリーによって明らかにする。具体的には次の2点について明らかにすることを目的とする。

1) 教師への社会のまなざしの変化

近年の教育改革や教育不信がもたらした影響に関する調査や事例、新聞雑誌記事にもとづき、教員の職場環境の変化を明らかにする。まず、a)実際に教師の職場や職務がいかに変化したのかを明らかにするため、戦後、とくに1960年代以降、現在までの教師、または学校に対する調査や新聞雑誌記事などを検討する。次に現在の教師の状況を、b)近年の調査結果とともに教師に対するインタビューなどにより検討する。こうした結果をもとに現在の教師の状況を明らかにすることでライフヒストリー調査の基礎とする。

2) ライフヒストリーによる教師の意識や生活の変化

上の実証的調査にもとづき、教師のライフヒストリーによって教育改革や教育不信の状況が教師の職場環境をいかに変化させたのかを明らかにする。その過程で、現在の教育改革を教師はどのように捉え、また現実にもどのように対応しているのかを教師のライフヒストリーにより分析する。なお、この調査では、新任、中堅、またベテランといった世代によってライフヒストリーを調査し、それぞれの認識の違いを明らかにする。この調査結果をもとに、教師の視点から教師と学校がいかに信頼を取り戻すのかについて検討する。

その際、諸外国での調査結果を参照する。先に示したように、英米では教師のライフヒストリー研究がさかんに行われている。とくに Goodson らはヨーロッパ各国でライフヒストリー調査を行い、教育改革と教師の生活について分析を行っている(例えば Goodson 2010『教育研究におけるライフヒストリー』東京学芸大学教員養成カリキュラム開発研究センターなど)。こうした英米を中心とした調査研究を整理、検討するとともに、日本の状況と比較し、日本の教師が現在の状況に対処する方策について示唆を得る。

また、この過程で教師をライフヒストリーにより分析するための方法論についても検討する。教師のライフヒストリー研究は近年になって一般化し、頻繁に用いられるようになってきている。しかし、その理解は表面的な場合が多い。諸外国に加え日本での方法論の議論を検討することにより、いっそうの方法論の精緻化を行う。

以上、大きく2つの分析により日本の教師が置かれた状況をライフヒストリーによって明らかにするとともに、教師の視点から教育不信を払拭し、信頼を回復する方策につい

て検討する。

3. 研究の方法

1) 教師へのまなざしの変化に関する調査

これまで日本で実施されてきた教師に関するアンケート調査などを収集、整理し、教師が置かれている状況がどのように変化してきたのかを明らかにする。とくに1960年代以降の教師研究を概観することで、教師の職務内容や職場環境、またその意識がいかに変化しているのかを客観的データによって検討する。

この作業と平行して、新聞記事、雑誌記事などに掲載された教師や学校に対する記事を収集し、整理する。とくに学校事故や教育問題にかかわり、教師、学校が批判的に記述された記事を中心に検討する予定である。そのことにより、社会の中で教師に対する視線すなわち教師に対する期待や不信がいかに形成され、変化したのかを明らかにすることができよう。

2) ライフヒストリーによる教師の意識や生活の変化に関する調査

8月以降：ライフヒストリー調査

ライフヒストリー調査も上と同様に夏休み以降継続的に行う予定である。平成25年度は小学校の教員を中心にライフヒストリーのインタビューを実施する。ライフヒストリーのインタビューは、長時間にわたることが多く、多忙な教師に対して実施するのは容易ではない。したがって、調査協力者が得られた場合には、この時期に限らず調査を実施する。

なお、調査対象者としては、申請者はこれまで継続的にライフヒストリーの調査を行っており、その対象者、また対象者から紹介された者の他、上でのインタビューで得られた協力者に依頼する。

4. 研究成果

戦後日本における教師像の変容

本研究の目的は、戦後日本における教師像の変容を明らかにすることである。

教師という職業は多様なメディアで取り上げられることが多い。いじめや不登校など、学校を中心とする教育問題では、主にテレビのニュース番組や新聞などのマスメディアによって教師の関わりがさまざまな形で描かれてきた。とくに教師が問題の主体となる場合、例えば体罰のように問題を教師が引き起こした際には、対象となる教師ばかりでなく、教師全体が批判の対象とされる。こうして現在の教師の「問題」が語られる。

同様に小説、テレビドラマやマンガなどのフィクションでも、教師は数多く取り上げられてきた。戦前から多くの小説で教師の姿が描かれ、戦後は小説ばかりでなく、映画やテレビドラマなど多様なメディアの中で教師が主人公として、あるいは脇役と

して登場している。

こうしたメディアの中で描かれる教師は、その社会と時代に応じた「教師像」に規定されている。マスメディアの中で行われる教師への批判は、ある種の「教師像」に照らして行われる。つまり、その社会が望む理想の「教師像」が存在し、それとのズレが問題行動として批判される。

フィクションの中で描かれる教師も同様に、その社会に規定される「教師像」を反映している。社会からの期待と同時に批判がフィクションの中の教師を性格づけることになる。理想的な主人公の教師も、陰険で悪賢い脇役教師も、いずれもある種の「教師像」によって形成されている。つまり、マスメディアでもフィクションでも、そこで描かれる教師は「非常に固定的なイメージ」によって規定されている。

しかも、こうした教師像は社会からの「まなざし」として教師の行為や意識までも規定することになる。たとえば、ウォーラーは教師に対する社会通念として次の二つのタイプがあるとしている。一つは悪意を持って教師の特徴をあげつらう「漫画的な教師像」であり、もう一つは「ぎせいの精神に富む」など教師を見て、「その感じを好意的にまとめたものであり、いわば理想化された教師像である」。教師はこうした相反する二つの固定的なイメージを持ち、そこで作られた「教師像というワクの中にとじこめられている」とされる。つまり、社会によって形成された固定的な教師像が教師の行為を規定しているとウォーラーは指摘している。ウォーラーのいう固定的教師像こそ、社会によって作られたものに他ならない。

では、現在の教師はいかなる社会からのまなざしに呪縛されているのだろうか。また、そうしたまなざし、すなわち教師像はいかに形成され、またいかに変化してきたのだろうか。本稿はメディアの分析を通して、戦後日本の教師像がいかに変化してきたのかを検討する。そのことにより、教師の行為を規定する社会からの期待とその矛盾を明らかにしたい。以下では、まず教師像をめぐる先行研究を概観しよう。その後、メディアで語られる教師像とその変化について検討する。

本研究では『朝日新聞』の社説から、教師をめぐる語りを分析し、教師像の変化を明らかにした。分析の結果をまとめると次のようになる。

1) 1970年頃までは、教師の職場や労働環境の改善について語られ、教師に対する批判的な語りはほとんど見られなかった。しかし、1980年以降は、教育問題の拡大を背景とし、教師に対する批判的語りが見られるようになった。

2) 「熱血教師」に見られるような献身的教師像は1970年頃までには見られない。献身的

的教師像は1980年以後、教師批判のアンチテーゼとして広まったと推測された。

3) 2000年頃から、教師に対する語りは、再び労働環境などが問題にされるようになった。つまり、否定的教師像は肯定的教師像へと変化した。

2000年頃を境に肯定的教師像に変化したのはなぜだろうか。その要因として、次の2点が考えられよう。まず、教育問題をめぐる批判の矛先が、教師から家庭へと変化したことである。いじめをめぐる報道やインターネット上での議論に見られるように、近年は保護者が批判の対象にされることが多い。また、モンスターペアレントなど、保護者がある種の問題として語られるようになってきている。その結果、教師は直接の批判の対象とはならなくなったと考えられよう。

もう一つの要因は、2000年頃に生じたゆとり教育から学力重視、進学重視への転換である。90年代までのゆとり教育の時代は、教育の効果が見えにくく、教師に対する不信が高まった。しかし、教育イデオロギーが学力重視に変わると、進学や卒業後のキャリアなどをめぐり、学校、そして教師に対する期待が高まることになる。その結果、教師批判の語りが消え、肯定的教師像が現れたのである。

こうした語りは70年頃までのものによく似ている。70年頃までは、2000年以後と同様に学力と受験が重視されていた。こうした教育イデオロギーの下での教師像は、肯定的なものになるのかもしれない。

それでは、こうした肯定的教師像とは具体的にいかなる教師像なのだろうか。言い換えれば、2000年代以降、教師には何が期待されるようになったのだろうか。今回の社説の分析のみでは、具体的な教師への期待までは明らかにできない。今後、さらに分析を進めることで、現在の具体的な教師像を明らかにしたい。

早期退職した教員のライフヒストリー
本研究の目的は早期退職した中学校教員のライフヒストリーにより、教員という職業に内在する困難を明らかにすることにある。

近年、教員の多忙が教育問題の一つとして再び取り上げられるようになってきている。教員は「ブラック職業」と揶揄され、その仕事量の多さ、長時間勤務、さらに低賃金での労働などが大きな問題とされている。とくに中学校教員の部活動指導はその象徴とされ「ブラック部活動」とも呼ばれている。実際に、部活動指導は早朝から放課後、場合によっては夜遅くまで指導せねばならない。また、週末や長期休暇も練習や試合の引率などで休むことができない。しかし、残業や休日出勤をしても、手当はごくわず

かでしかない。労働環境の悪い一般企業が「ブラック」と呼ばれているが、教員の労働環境はそうした「ブラック企業」以上に悪化しているとされる。

こうした状況を改善するため、文部科学省は中央教育審議会で「学校における働き方改革特別部会」を開き、2017年8月に「学校における働き方改革に係る緊急提言」を発表した。その内容はタイムレコーダーなどを学校に導入し、勤務時間を厳密に管理することなどにより、教員の勤務時間を短縮しようとするものであった。また、教育学研究者などによっても、「教職員の働き方改革推進プロジェクト」として、教員の勤務時間短縮を求める署名活動などが行われている。

教員の勤務時間の問題を改善する上で、こうした活動は重要である。しかし、一般企業の「働き方改革」と同様に、あるいはそれ以上に教員の「働き方改革」は困難なものである。

一般企業でも以前から労働時間の短縮や適正な休暇の取得などが求められてきた。しかし、いまだに十分な改善は実現されたとはいえない。それは労働時間などを制度的に制限しても、持ち帰りや会社外での労働を暗黙のうちに強いたり、あるいは自主的に行ったりするためである。こうした企業の体質や社員の意識が「働き方改革」の大きな障害になっている。

教員にはさらに強く社会から時間外労働や過重労働が求められている。例えば、2014年4月に子どもの入学式に出席するため担任するクラスの入学式を欠席した教員が厳しく批判された事例は、教員への社会的な要求の厳しさを象徴するものだろう。その教員と子どもにとって、入学式はまさに一生に一度しかないイベントである。そうしたイベントに参加することがなぜ批判されるのだろうか。近年、「チーム学校」というキーワードで教員の職務の分業や相互補助が進められているようになってきている。しかし、そうした動きとは対照的に、個々の教員にはさらに過剰に職務に忠実であることが求められているようである。教員には自分の生活を犠牲にしてまで児童生徒のために働かなければならない、すなわち無私の「献身的教師像」が社会的要求として突きつけられていることになる。

こうした社会からの教員への要求は、少なからぬ教員にも内面化されている。勤務時間を短縮しても、また、職務の範囲を制限したとしても、持ち帰りや学校外で働くとする教員は少なくない。仮に5時以降の学校での職務を禁じたとしても、学校外で仕事をする、つまり、生徒指導や部活指導などを行おうとする教員は少なくないだろう。実際に部活動指導のために自主的に進んで時間的、経済的な負担を引き受ける教員は多い。こうした教員は、「献身的教師

像」を内面化しているのではないか。

したがって、教員の「働き方改革」は制度的な改革だけでは実現できないことになる。社会の持つ「献身的教員像」を修正し、教員の意識を改革する必要がある⁽¹⁾。だが、教員はいかに「献身的教師像」を内面化しているのだろうか。また、「献身的教師像」の内面化は、教員という仕事をいかに困難にしているのだろうか。

そこで、本稿では、早期退職したある中学校教員のライフヒストリーにより、早期退職にいたった要因を明らかにしたい⁽²⁾。その上で、教員がいかに「献身的教師像」を内面化しているのか、また、それが教員の初期キャリアでの退職にいかに影響を与えているのかを検討したい。

分析の結果、中学校教員を早期退職したUさんのライフヒストリーを検討してきた。その結果をまとめれば、大きく以下の3点になる。

1) Uさんは小学校3年生から教員になることを夢と考え、高等学校まで各学校段階でその教員になりたいと思いつけてきた。つまり、学校に強く適応し、学校的価値観を内面化していたと考えられる。

2) 教員の仕事が多忙なのは、ある意味当然のことかもしれない。人によって教員のしんどさは「やりがい」になるのかもしれない。それを難しくした大きな要因の一つは生徒の荒れであった。生徒の荒れに対応することで、多忙さはいっそう助長されることになった。

3) うまくいかないことが積み重なることによって、それが大きな精神的負担となってしまった。「オンとオフの切り替えができなくなり、失敗を「ずっと永遠に考えたり」してしまう。こうして精神的に追い詰められたことが退職に繋がったのである。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計6件)

黄嘉莉・山田浩之・周正・班婷 2018「日本教師證書更新制度之調査研究」『比較教育』(中華民国比較教育學會)、83巻、pp.55-83、査読有。

山田浩之 2017「早期退職した教員のライフヒストリー」『教育学研究紀要』第63巻 pp.330-335、査読無。

伊勢本大・山田浩之・周正 2017「教員免許更新制に教員は何を求めるのか?」『教育学研究紀要』第63巻、pp.314-323、査読無。

西本佳代・山田浩之・伊勢本大・濱本行治・梅田崇広 2016「休職・離職をめぐる教師のライフヒストリー」『教育学研究紀要』第62巻、pp.109-120、査読無。

山田浩之 2016「戦後日本における教師像

の変容」『教育学研究紀要』第62巻、pp.97-102、査読無。

山田浩之・伊勢本大・藤村晃成 2015「教育改革における教師のライフヒストリー」『教育学研究紀要』第61巻、pp.364-372、査読無。

[学会発表](計12件)

Yamada, Hiroyuki “Teaching in Difficulties: Life History of a Teacher who Resigned Early in Her Career in Japan, 教育学原理高端講壇(招待講演) 2017年12月22日、北京師範大学(中国)。

Yamada, Hiroyuki “The Examination of Bad Teacher Discourses in Japan, 台湾教育社会学会(招待講演) 2017年5月6日、国立台東大学(台湾)。

西本佳代・山田浩之・伊勢本大・濱本行治・梅田崇広「休職・離職をめぐる教師のライフヒストリー」中国四国教育学会第67回大会(鳴門教育大学) 2016年11月5日。

山田浩之「戦後日本における教師像の変容」中国四国教育学会第67回大会(鳴門教育大学) 2016年11月5日。

山田浩之「『教員の資質低下』という幻想」中国教育社会学会(招待講演) 2016年11月18日、雲南民族大学(中国)。

Yamada, Hiroyuki “The Decline of Teachers’ Ability as an Illusion.北京師範大学教育社会学フォーラム(招待講演) 2016年6月24日、北京師範大学(中国)。

Yamada, Hiroyuki “Changing Life and Work of Teachers in the Era of Distrust for Education in Japan: after 2000.台湾教育社会学会(招待講演) 2016年5月21日、国立中正大学(台湾)。

山田浩之・伊勢本大・藤村晃成「教育改革における教師のライフヒストリー」中国四国教育学会第67回大会(岡山大学) 2015年11月14日。

Yamada, Hiroyuki “Changing Life and Work of Teachers in the Era of Distrust for Education in Japan: after 2000.東華大学教育フォーラム(招待講演) 2015年6月5日、東華大学(台湾)。

山田浩之「現代日本の教育問題と教師像」台東大学(招待講演) 2015年6月5日(台湾)。

Yamada, Hiroyuki “Changing Life and Work of Teachers in the Era of Distrust for Education in Japan: after 2000.中正大学教育フォーラム(招待講演) 2015年6月2日、中正大学(台湾)。

Yamada, Hiroyuki “Changing Life and Work of Teachers in the Era of Distrust for Education in Japan: after 2000.台湾教育社会学会(招待講演) 2015年5月30日、国立暨南国際大学(台湾)。

6. 研究組織

(1)研究代表者

山田 浩之 (Yamada Hiroyuki)

広島大学・教育学研究科・教授

研究者番号：60258324

(2)研究分担者

()

研究者番号：

(3)連携研究者

()

研究者番号：

(4)研究協力者

伊勢本大 (愛媛大学)

藤村晃成 (広島大学大学院)

周正 (広島大学大学院)

西本佳代 (香川大学)

濱本行治 (広島大学大学院)

梅田崇広 (広島大学大学院)